大池・・・伝説と史実と

(1) 大池の出現

有史以前のことで、地殻変動を繰り返し、柿野地内において、旧地名通称の裏山の釈迦堂山・西の街道表面の山崩れ・前山の黒洞、地徳も山容の変わるばかりの、

N0.21

土石流が、西南方へ流れていました、柿野谷川は西方に流れていたが、石橋地区あたりで、完全に塞がれ、東方の洞戸方面へ流路変り、更には、それと前後して、裏山の大加洞と、前山の備矢洞も同様な変動があって、流出した大量の表土は、村の中央部がうづ高くよって、高辻地点の東西の分水点となりました。

注、高辻分水点=西側・・出戸川→武儀川→長良川（岐阜市千疋地区合流）
=東側・・洞戸川→板取川→長良川（美濃市曽代地区合流）

この東西の中央部あたりだけが、挟まれた様な地形となり、ごく自然の形で雨水が流れ寄って、流路が塞がれ、更には、桑洞谷からも流入した水は、大池の形となり幾世紀にも亘って、その周囲をも泥沼をつくり、大湿地となって、そのままに人が住む様になる迄の、長い歳月が過ぎました。

山崩れにより、大岩盤が突出した地形が発生し、のちのち、この大岩盤には、岩茸（いわこけ）が生えるようになり、近代まで貴重な食材としてのみでなく、漢方薬としても、利用され、江戸時代には、柿野特産品『石茸』とも、書かれています。

(2) 民話の中の大池

N0.22

昔々からこの大池は、干し上がることなく満々と、湧き水を堪えてそれ故に、底無し池と云われ、柿野村に伝えられて来た数々の民話のなかでも、特に興味をそそるもので、現在尚その一端を、柿野祭りの檜車山（ひのきだし）に、思い知る事が出来ます。

・この大池に棲む『主』の大蛇と、喜三祢宜（きさんねのり）を型どった作り物です。

・大池の主、大蛇は、天を型どった作り物です。

注、柿野祭り場の祭り説明の看板に、『大蛇』と『喜三祢宜』との文面うんぬんが、掲載されています。

大池の主、大蛇は、天変地異と相まって、村人を悩ませ、台風・大雨・大洪水・果ては地震・雷などすべてが、他の村より多いとされ、大蛇は『荒振神（あらふりかみ）』として、人々から畏（おそ）れ、怖（こわ）がされ、雨・風・果ては、はやり病などまでも、大蛇が呼び込むものとさえ、ささやかれて来ました。

特に江戸後期(1865年頃)のコレラの大流行は、恐れられて一晩のわずらいで、多くの

多機能印刷 FinePrint6 試用版 http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

死者が出たと云われ、『コレラとは、そろりと来て、コロリと死す』と本気で云われたとのことです。　処でこの畔(ほとり)には、十王堂と称する一宇(いちいえ)がありました。
この十王堂には、白髪・白鬚の修験者が喜三なる人が篭っていて，天神地祇(てんじんちぎ)を祀(まつ)り、仏法を極め、あらたかな法力を習得して、村人からは喜三祢宜と崇められ、親しまれていました。　神仏との中間に在って、その代弁者ともされる程と修行を極めた超人・尊様に、村人は、恐ろしい天変地異を誘い出す様な、大蛇を何としてでも、いずれかへ封じ込めてほしいと、こぞって喜三祢宜に懇願しました。
村人の、この切なる願いを応とした喜三祢宜は、穀断ち・火断ち・塩断ちをして、夜な夜な水をとっては、丑の刻に祈祷を修しました。
日を置いて、二回の不気味な地震・大雷雨が止むことなく降り続き・大池は誉と無いばかり、満々と水を堪え、明け方の大雷雨で雨は上がり、この水は、いつ引くとも知れぬと、村人はおののいたと云います。この時が喜三の祈祷の満願日だったのです。
喜三祢宜の法力により、大蛇は、越前の夜叉が池へと、封じられました。

それからは、村人たちは、平和な農耕を、営む日々となりました。
大蛇は、住み慣れた大池からも、柿野からも、去りともないと、哀願しましたが、それはならぬ、その代わり一年に一度だけは許そう、時は柿野祭りの檜車山祭礼当日の、3月15日との約束で、現在でも檜車山の側面に、白髪・白鬚の喜三祢宜と、念怒の形相の大蛇の姿とが、祀られています。注、檜車山の側面を見られてはと?。
厳修される神事に依って、その昔の様に、大蛇は仇なすことなく、村は、平穏な歳月を重ねて、現在に至っています。注、現在の柿野祭りは、4月第2週日曜日です。

(3) 民話　田売れ

昔々柿野の大池のほとりに、古い大寺がありました。この寺は明治初年(1870年前後)に、廃寺となって、壊された浄泉寺であったかどうかは、定かではありません。
この寺で朝に夕に撞かれていた梵鐘ある日、とんでもない音を出す様になりました。
一つ撞いたら『田売れ』、二つめには『地売れ』、三つめには『柿野こっぱい』と

多機能印刷 FinePrint6 試用版　http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

響きました。 村人は、大いに驚いて、さて此の鐘をどうしたものかと、相談しましたが、意見百出で名案とて無く、結局は、こんな不吉な音を出す鐘は、大池へ放り込んでしまえの意見に、村人は、意義を唱えることなく、寄ってたかって、大池の底無しと云われた『目』へ、放り込んで、沈めてしまいました。

放り込まれたこの鐘は、この目の底を潜って、大矢田村の青柳へ出たとゆうのです。

この昔話は、美山の民話(美山民話編集委員会編)のなかで、『鐘に刻んである文字から、柿野のお寺の鐘じゃということが、わかったから不思議なこともあるもんじゃ』と記載がありますが、この事と関連があるかどうかは、今では立ち消えの様になって語られることは、ありません。

その後の明治の中頃(1890年頃)に、この大池が干拓されて水田となり、稲作が行われる様になって、耕作中に池の目にあたる場所に、鐘撞堂の柱か、桁と思われる様な平たい、大きい角材らしいものが、足にさわったと、云われていました。

このほうり込んだ鐘が、浄泉寺の什物であったとしたなら、その二代目とも云うべき

鐘は浄泉寺が、廃寺となった後も守られて、現在福岩寺にあって、朝夕の刻を告げています。

(4) 大橋

この大池は、前述の如く、水が溜まる事はあっても、出る事の無い、自然の地形のままの状態で、流路の定まらない、池尻あたりの一帯は、いつも大混地であって、特に雨後の数日間や、梅雨期ともなれば、村の中央部にあっての、この地点の通行は、完全に不能で、天候の安定したときのみ、丸太を渡しての伝い歩き程度で、それさえも踏み沈めて、その都度次々と丸太をが渡され、農耕の牛馬の通行など、思いもよらぬこと、従って、田畑や山仕事など生活道路は、牛像峠からは、乙洞橋から中洞経由小洞へ、浄泉寺前を通って、小山から大加へて、民家の軒伝いで、その昔から柿野祭の試楽本楽など、柿野大明神外宮の大神輿の渡御も、大名行列の馬も、神楽巫女の一因もすべて、此の道が本道りであって、年配の村人は、昔を語るとき、『馬道』・『神楽道』と、親しみを込めて、称していました。

多機能印刷 FinePrint6 試用版 http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

その馬道も、他の小道と同様に、度重なる改修工事によって、姿を大きく変えて、便利と引き換えに、昔を偲ぶ事はむつかしくなりましたが、ほんの部分的に往時の道(柿野共同墓地北の区有林杭より、害獣フェンスが北方向に、張りめぐされている箇所の通路)が、当時のままに近い状態で残っています。『約70cm幅程=一人通行可』これとても、他の古い祭具・神具などと共に、昔を語る大切な遺産として、守ってゆきたいものと言えましょう。

この道路状況は、この地に住みだした村人が不便さを、当然の事として来たのでしようが、何としてでも、あの池尻の通行が、晴れ・雨に関わらず可能とならぬものかと、しつつも、実行とは決断なされなかった幾歳月、あたかも江戸後期(1865年頃)に、偉人が現れました。

村の財産家であり、人望も高い百姓小左エ門、その人です。

前代未聞の計画として、この池尻を深く掘り下げて、排水路を作ろう、さすればこの広い混地帯もなくなり、橋を架ければ、東西の通行が、容易になるとの発想であり、

その実際には、多くの人手間と、日数と、それに第一には多額の費用のかかることでした。　小左エ門は、村人の賛成があれば、私財を投じようと云うのです。

村人には、願ってもない話です。

処でこの工事は、高低差のほとんどない、混地帯を掘り下げようとするのですから、神明谷あたりから、堀り方を始めようとするので、全長300m程にになります、深さは一番深い場所では、5・6mあり、掘りあげた土は、もっこで運び、大池の畔から埋めていく、形となりました。

深い場所の水路の最低部幅は、1m弱でしょうか、計算したらなら当時としては、大量の土量を、すべて村人の汗による、肩と背で上流に向かって、大移動させた事になります。　貫通した水路は、直ちに大量の水嵩(みずかさ)となり、大池の水面は徐々に下がって、狭くなり、池畔の北側あたり一帯は、肥大な農地として耕作される様になり、以来涸(か)れる事の無い水路は、現在出戸川の最上流となっています。

この工事にて、混地帯の悩みは、完全に克服され、お目当ての架橋の位置とは、水路

多機能印刷 FinePrint6 試用版　http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

の中央あたりで、その天巾の最も狭いあたりと決められました。

小川に架かる橋とは、土橋が普通で、木橋や板橋より、安上がりから有なのです。

然し小左衛門は、のちのちの世になっても、補修や架け替えをしなくてもよい『石』でというのです。　近郷にあっても、古来聞いた事の無い石橋なのです。

橋石材は、対岸まで届く長大な平角状の桁形の様な、大体揃った2本と、橋桁を補完するなどの石として数個、裏山の桑洞の奥から、小丸太を何本も並べたコロを使って曳きだされました。

*注、橋材2本の概略寸法（垣野神社参道・右側に保管されています。）

・□：幅=60cm×厚さ=45cm×長さ=2.5m 程度の2本（1本は破断）・人馬通行程度幅

その後、湿地のの悩みと共に、村の東・西ををつなぐ橋が架かって、不便も一ぺんに解消し、村人はこの大偉業を賛えて、誰云うとなく大橋と称する様になりました。

小左衛門のこの偉業は、時の上有地代官所より、破格のお褒めが下され、更には、『小橋』の姓を許され大橋と共に、小橋の家名も以来代々譲えられ、崇められました

現在この道路は、度重なる改修や拡幅工事が行われ、高低起伏のあった路面も、各所でS字状に曲がった箇所も、ほぼ直線状になり、県道へと昇格され、昭和中期頃(1955年頃)には、柿野～東洞を終点とする路線バスが運行されたこともありました。

この道路の拡幅大改修の祭、此所の大橋は、昔ながらの谷状の水路を、跨(また)ぐ様に、直角・クランク状に架けて、取り付けられていたのですが、東西よりの道路面に、合わせて大きく盛り土がなされ、直線状の道路となりました。

この改修工事の祭、埋没する巨橋石を、何としてでも、後世に遺(のこ)したいものと、運び出され、取り外された巨石橋は、垣野神社参道の向かって右側に移動されてあり、誉ては、橋石の側面の凹凸の少ない面に、『享保拾四歳乙酉閏九月吉祥日』(1729年)と、彫り込まれた文字が、読み取られます。

惜しまれることは、運ばれる道中に、2本のうちの1本が、中央部より破断していることです。　小左衛門と称する人物には、安永九年(1780年)柿野大明神大般若奉納にも同名の記載あり、50年の差があることから、家系継承・襲名があっても当然かなと?

多機能印刷 FinePrint6 試用版　http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

(5) 干拓

時代は、江戸後期の享保(1716～1735年・江戸期～1867年)から、明治(1868年～)へと移ります。　昔は、何時の時代であっても米とは、最高の食とされていました。
特に耕地の狭い、山村にあっては、尚更の事、それだけに海を全く知らない土地だけに、魚とは、これまた貴重な高価な食材だったのです。
わらべ唄にさえも、赤いまんまに、ととそえてと、唄われました。
その昔米とは、原種と云われた赤米だったので、その様に唄われたのでしょう。
明治24年(1892年)、この大池の水を干しあげて、田んぼに出来ぬものかと、此の地としては、途方もない構想を画いた、快男児が現れました。
それは、日清開戦の直前の年です。　日本は、急速に近代化に突っ走り、富国強兵の架け声で軍国日本へとの、合言葉が次代に大きく叫ばれる様になっていきました。
なぜかこの頃からか、国連に関する様な大不況と開戦とに、相関関係を否定出来ない様な、事態へと進んで来ました。

日清戦没、日露戦争、満州事変、日支事変などなどと、その直前は、政経共に八方塞がりで、農山村にあっての、貧農層では、現金収入が途絶えて、もじどうり塗炭(とすみ)の苦しみに喘(なげ)いで、土手に植えた、一本の桑の木も大事として、養蚕(ようかいこ)に骨折っても、手間代も出ない程の、生糸の大暴落による、繭(まゆ)の安価、紙漉(かみす)きであっても、原材料にもおよばぬ安価で、食うに事欠く生活、ましては米の飯など、夢のまた夢で、そんな時勢に、田んぼを作って、米を獲(か)るとの発想は、大きな魅力でした。
この提唱者は服部滝三郎、この人・資産家で商才もあって、炭・紙・油などを商っていて、いち早く外部からの情報なども、得易(えやす)くて少しでも、村の利になる見通しも、それに、どれだけの耕地、如何ほどの反収、工事の方法など、逆算なども加えて、着工した事でしょう。
村人にとっては、願ってものない事、まずはその日の生計を糧(かて)を、得るてだとして、仕事にありつけて、どれだけの賃銀が得られる事が、まづは最大の魅力だった事でしょう、前述の如き、大不況には、必ず底辺を支える貧民層が、影響を受けて、*寒村に*

多機能印刷 FinePrint6 試用版　http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

あっては、誰しもが、その日を喰って行ければ、偉(えら)せとして、自分たちの家と家族を守ってきました。

それだけに江戸中期頃(1735年頃)からの、度重なる不景気をはるかに上廻る飢饉(ききん)には、米どころではない、何でも食べられるものは、食材として、いただいて来ました。

古書に残された記録に寄れば、この次々と脅かされ続けた、大飢饉の最たるものは、天保年間(1830～1843年)の再三に亘っての、上有知代官所へ『・・・追クト死ニ行ク者多ク生キテ井ル者共年々離散シテ亡村モ間近カ・・・』との、嘆願書を持って訴え出ています。

時降って、明治5年(1872年)の記録では、柿野村戸数=332・人数=1041人・田=9町2反(その頃は、柿野田とされていた水田は、見鹿、それに相戸の流れ地内の一部も土地台帳に、記載されていました。)とあって、昭和40年(1965年)の大規模な、基盤整備の頃までは、『柿野40町』と云われて来ていました。

この40町歩とされて来ました柿野田も、相戸地区の人たちも所有地あり、また村外の

資産家と云われた人たちの所有地もあって、前記の柿野村1041人の生活を満たすにはとても及ばぬ事だと、思われます。

明治24年頃(1892年頃)にあっても、この水田耕作者は、その大半が小作人であって、地主との間で、定められた年貢米は、作の豊凶に係わらず、納めねばならず、不作の年であっても、軽減される事は無く、従って小作人は、自家保有量が皆無であっても稗(ひえ)だけは己れのものとして『稗もうけ』の不合理なあきらめを、諾とさせられました稗と云えども当時は、稗屋根葺き替えの必需無資材の縄、雨具としての蓑(みの)、草履(くさぐつ)、草鞋(くさぐつ)用として、不可欠の資材であって、米とはまことに、貴重な最高の食料で、この米穀崇拝の考えは、第二次大戦後(大戦=1939～1945年)まで、変わらず年配者にあっては、現在も尚、一粒の米でも、粗末には出来ないとの精神は、衰えてはいないのです。

従って、麦類を主食としての、食生活での重労働、今では死語となった食材や、調理法も、当時では当たり前、人生50年といわれた、日本人の平均寿命も、理由はそこらあたりであったのでしょう。

多機能印刷 FinePrint6 試用版 http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

こうした、あきらめに似た、村人の耳には、大池の干拓は、明るく夢を広げました。
工事の実際は、専ら人力で、前記の流水工事以来の水路の底部を、更に堀下げ、放り上げられた、大量の水分を含んだ泥土は、拡げられて水分を切ってから、畚(もっこ)で担がれて、徐々に池が埋められてゆき、工事の見当がついた頃、二頭の馬が雇われ、力を発揮しました。　馬主は、藤田源吉と藤田与右エ門とのことであったとのこと。
処で、工事の最中に、大池の『目』あたりで、源吉の馬が、底無しの深みに、はまり込んで、出られなくなり、人夫総がかりでも、何とも難く、誰云うともなく『これは池の主の大蛇怨念か』と恐れおののいて、寺の住職に、お経とを上げてもらって、御祈祷をしてもらって、夕刻になって、やっと馬は救出されたとのこと。
この一件は、当時源吉の相棒であった、与エ門の長女、およね婆(ばあ)さんから、聞く事が出来ました。　(およね婆さん ⇒ 平成10年=92歳 ➡ 1998年)
掘り下げられた、水路の底部側壁は、玉石で積み上げられて、崩落を防ぐ様になされ今でも、旧大橋地点より、やや上流あたりでは、崩れる事なく、残っています。

更には、池の四囲を取り囲む様に、排水路が掘り下げられ、雨後や雨期は別として、耕地となる大部分は、露出しました。
処で、灌漑(かんがい)用の水源らしい所は、桑洞谷と大加洞谷の一旦水を待つのみ、従って田植え季にあっても、満水状態から、平水になるのをまって、植えられました。
それだけに、柿野田あたりの土質より、更に緻密(ちみつ)な耕土は、旱魃(かんばつ)の年でも稲が枯れるとゆう事は、全く無いという利点の一方、管理上の水の掛け引きは、一切出来ず、用水としては、山一つ南の向いケ洞の腰あたりに、溜池(ためいけ)を作って、樋(とい)を架けつないでの導水です。
樋は、径40センチ程の長尺の松丸太をU字型に彫って、急斜面を次々と架け継いで、いっきに、水を走らせました。　松材とは、水に浸けばなっしならば、腐ることはなく『生松千年』といわれ、樋には最適材なのです。
この水源よりは、500メートル程ですので、この間に、ほぼ100本位は、丸太がつかわれたことになり、耕地ととなった総面積は、ほぼ1町5反ほどで、これから推計するに

多機能印刷 FinePrint6 試用版　http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

享保以前(1716年以前)の池面は、この数倍であったであろうことが、わかります。
尚、大池の南岸あたりの、稲荷神社は、村人の内の信奉者らに依って、長年守られて来ていますが、、古来の大池との、直接のかかわりは、伝えられていません。

注、　大池の干拓面積 = 15,000㎡　(□120×120m)　程度(予測地)
　　大池の形成面積 = 75,000㎡　(□270×270m)　程度(予測地)

(6) 大池のそれ以後

大池の田は、その後、幾度の旱魃(かんばつ)や冠水などによる、不作の年などに耐えつつも、その都度、田としての役割を果たしてきました。
特に第二次世界大戦前後にあって、毎年少なくても、50表程の収穫量は、村人の命の繁(つな)ぎの一環として、特筆されるべき事実だったのですが、戦後の世情恢復(せじょうかいふく)と共に暫変して、あまつさえ農政に至っては、転作や減反政策がとられて、奨励金を出してでも米作を減らそうとの方針で、農家は工場勤めや、建設作業の現金収入のよい

方へと走り、片手間の農地は、次第に放棄されてゆき、この干拓田も高度成長期ころから、荒れるに任せる様になりれました。
佐野坂トンネル工事の施工に関して、この荒れ地となった干拓田を、トンネル工事の残土処理場とし、埋め立てをとの計画も、持ち上がりましたが、当時10余名の所有者のおもわく、利害関係なども交錯して、その間にトンネル工事は、すでに着工され、結局、埋め立て話は、立ち消えになりました。
もし実現していたてならば、総合リクリェーション施設にとの、構想もあったとされていますが、その方向で計画が進められていたなら、ふるさと柿野の姿も、どれだけかは変化して、他地区からの来訪があり、人々の憩いの場所かもとも想像されます。
その後、この土地計画は、再浮上せず、地主たちも持て余し気味で、作付けもなされないままに、休耕田として続けられ、一方建設ブームは、佐野坂トンネルほどの、大規模ではなくとも、各地で開発が進み、業者も残土捨て場の確保に、魚の目・鷹の目で、これの地に、白羽の矢を立てて、次々と埋め立てが進められてゆきました。

多機能印刷 FinePrint6 試用版　http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/

後として、古い民話や貴重な先人の偉業としての田に、大昔の大池を偲(しの)ぶよすがは、消え、時代の推移と共に、古老の口伝えに聞く事も、出来なくなって行くのは、寂しい事です。

大池跡地のこの場所が、現在思うには、柿野を語る歴史・民話・前世の人々苦難等の功績を偲ばれる地であることと、荒れ地ではなく、後世に広大な土地の有効的な、活用がされることを、願っています。

大蛇、棲みぬしとの大池、いまは無し

鐘、沈めしとの民話、もろとも

多機能印刷 FinePrint6 試用版 http://www.nsd.co.jp/share/fineprint/